『インヴィンシブル』
スタニスワフ・レム(著)、関口時正(訳)

国書刊行会
2021.9

レムとハインライン

『砂漠の惑星』の邦題で広く読まれてきたスタニスワフ・レムの代表作『インヴィンシブル』(原題 «Niezwyciężony» 1964)が、ついにポーランド語から翻訳された。原題には「無敵」「不死身」という意味があり、作中では宇宙船の名前として使われている。学生時代、宇宙は人類のためにあるのではないという徹底した認識と、人類の存在を拒絶するかのように繰り広げられる機械と機械の黙示録的戦闘の末に焦土と化した惑星をひとりさまよう主人公の姿に惹かれ、私はSFに回心した。そうした読者も数多いに違いない。

さて今回、再読して気づいたのは、アメリカのSF黄金時代を代表するロバート・A・ハインラインの『人形つかい』(1951)との類似と相違である。

『人形つかい』は侵略テーマの古典として知られる。宇宙からナメクジ状の寄生生物が地球に飛来し、人間に寄生して宿主である人間を意のままに操ろうとする。それと戦う主人公たちは、一貫して寄生生物に対し敵対的態度を取り、核兵器の使用も辞さず敵の殲滅を図る。寄生生物の弱点を発見し、地球から掃討することにほぼ成功した人類が宇宙船「アヴェンジャー」(復讐)号に乗り、寄生生物の母星を攻撃すべく出陣する場面で小説は終わる。

着陸後に消息を絶ったコンドル号の捜索のため琴座の惑星レギスⅢに降り立ったインヴィンシブル号が発見したのは、廃墟と化した《都市》と、砂漠にめり込んでそそり立つ変わりはてた姿のコンドル号であった。謎に満ちたこの惑星でいったい何が起こったのか！？---ファースト・コンタクト三部作の傑作『砂漠の惑星』のポーランド語原典からの新訳。

国書刊行会
スタニスワフ・レム・コレクション/第７回配本

レムの小説の世界観

レムの小説が『人形つかい』のような人類中心主義的な世界観と隔絶した地点にあることは明白だが、小説の設定には類似点も多い。舞台となる惑星レギスⅢで遭難した宇宙船の捜索に派遣された「インヴィンシブル」号に、なぜわざわざ反物質砲を備えた巨大な戦闘兵器が搭載されているのか？これはレムの独創ではなく、ハインラインのような小説でまさに描かれていたものである。レムは「どこへ行くにも大量破壊兵器を宇宙船に積んでいなければならないのか？」と主人公に語らせている。これは先行のSF作品の潮流への批評的挑戦であろう。徹底的に敵対的な関係にありつつ敵対的意図については相互に十分に通じ合うハインラインの小説と、「敵」という認識ではとらえられない関係を描いたレムの小説との間には根本的な相違が存在する。

ところが、そのような相違を超えた類似が存在することも、今回あらためて強く感じた。

人類と個人の葛藤

『インヴィンシブル』の最後で、主人公は遭難した四人を捜索するため死地に赴くことを決断する。しかし、それは上司による軍隊的な規律を背景にした狡猾な策略の結果であり、主人公が選ばれた理由も、一度目の遠征から唯一無事に生還した人間であるからだ。いかにも人間的な顔をしながら非人道的な決断を迫られたのである。実は、これとほぼ同様の場面が『人形つかい』の中にもある。寄生生物にわざと寄生される被験者として主人公が二度目の寄生を迫られるのだ。『人形つかい』の中では、それは英雄的行為として称揚されている。

この類似は一体どういうことか。機械同士の黙示録的戦闘、「キノコ雲」と化した「インヴィンシブル」号の戦闘兵器――これらには20世紀の人類が経験した戦争の苛烈な体験が影を落としている。

しかし問題は、個人の英雄的行為につながるとされる軍隊的規律に対する認識である。惑星レギスⅢの自動機械の集合的な非生命体の活動を前にすれば、人類の知性の特徴とは、集合的知性としての人類と、知的生命体としての個人という二つの次元との往還にあることは明瞭であろう。人は集合であることからも、個であることからも離れられない。それにもかかわらず、軍隊的規律を背景に主人公がただ個人として死の惑星をさまようことを任務として強制され、神秘的ともいうべき体験をへて、その行動が最後に「インヴィンシブル」(不死身)と呼ばれるのはなぜか。翻訳は鮮明になりつつも、謎はいっそう深い。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家、大阪市在住)